わくわく国際交流

深川国際交流協会　広報誌　Vol.1（創刊号）　1997．8

世界に発信する深川地球市民をめざして

深川国際交流協会　会長　**芳賀　昭雄**

近年の世界的な情報・交通の発達は、産業・経済・文化などあらゆる面で世界の相互依存関係にあり、私たちの日常のくらしもこれを抜きにして考えることができません。このような環境の中で将来を見据え、地域の国際化に対応できる人材の育成と地域づくりに重きをおき、市民レベルで積極的に取り組むことが求められています。このようななか、今年３月に多くの市民の賛同を得て「深川国際交流協会」を設立しました。

協会は事業推進の密度を濃くするために「企画広報」「国際理解・ふれあい」「海外交流」の部会編成をし、**世界に発信する深川地球市民**をめざして活動を展開しているところです。

これらの推進にあたって、深川市のご支援や市民の方々のご理解に敬意を表し感謝を申し上げます。

重ねて本協会の新たな創造のためにお力添えを賜りますようお願いしてごあいさつといたします。

市民一人一人が交流の主人公に

深川国際交流協会　理事長　**小滝　　聰**

国際化は深川から

「日本の国際化は北海道から始まる」といつも考えておりました。歴史的にみて北海道ほど異文化に対して寛容になれる土地柄のところは日本には見当たりません。北海道を良く知る外国人が「いごこちが良い」と感じるのは、単に人々が親切というばかりでなく、異文化・異なる価値観に対して北海道の人達が比較的弾力的だからでしょう。

国際交流は近年この深川で急速に活発化してきました。昨年、今年とカナダからの短期留学生が深川市、および近郊にホームステイをしながら交流活動を行いました。彼らは私達に様々な楽しいハプニングと思い出を残しながら去っていきました。また、深川から海外に出掛けて行く人の数も年々増加の一途です。深川ぐらいの規模の町が外国人の研修を受け入れ、交流を重ね、お互いの歴史や文化を学ぶ単位としては最適のように思います。

交流は言葉ではなくハートで

外国人と接触することに消極的になってはいけません。異なる文化や歴史、価値観を知る絶好のチャンスです。経験がない、語学力がないと後退りしていてはなにも始まりません。ふれあい、お互いを理解しようと努力し、ときにはいらだち、そしてそれを乗り越えて相手が分かり、自分の本当の姿を理解してもらえるものなのです。そうした接触を重ねていくと、いままで遠い存在であった人達が身近に感じられ、違って感じていたことが共通なものとして見えてきます。今年、フレーザー・バレー大学から来られていたリンダ・

ブラウン先生が送別会のスピーチで「お互いに言葉の不自由があったけれど、心と心が通いあって素敵な毎日でした」といっており「深川の人々の暖かさを生涯忘れません」と結んでおりました。

普段着で接触しよう

国際感覚を持つということは結局は「あまりウチだソトだと区別しないで、お互い仲良くするために心を開いて、ありのままの相手を理解しようとする姿勢を持ち、普段の自分を伝えようと努力する、そういう気持ちを持つことだ」といえます。こうした姿勢を持つことは私達一人一人の問題です。私達の日常生活はもはや国際社会との関係なくしては成り立たなくなってきました。ですから世界を知り、そして日本人の本当の姿を知ってもらう努力は、私達日本人全員が真剣に考え、乗り越えなければならない課題です。そのために必要なことは普段着の、日常の私達の姿を見てもらうことが大切です。そしてまた、彼らが日頃考えていること、普段の姿を知ることが大切です。

内なる国際化を

私達の意識の変化、姿勢の変化がいま求められていると思います。これだけ生活のグローバル化が進んだ世の中に生きる者として、彼らを「外国人」としてではなく、同じ国際社会に生きる仲間同士として観る必要があります。こうした意識の変化を「内なる国際化」と呼ぶとすると、この「内なる国際化」はもはや他人ごとではなく、私達一人一人の課題として受けとめなければならないと考えます。

【深川国際交流協会の目的】

地域の国際化に積極的に対応し、市民レベルの国際交流を推進していくために深川国際交流協会を設立いたしました。

協会は深川市にふさわしい市民レベルの国際交流を推進することにより、
諸外国との友好親善と相互理解を深め、
市民の国際的視野を広げ、
次代を担う人材を育成し、
地域の国際化と個性豊かな市民ライフの実現を目指します。

✐深川国際交流協会広報誌の創刊号では、カナダから来日した中学生との交流を終えた感想、インターナショナルデーのもようが中心になります。

カレン･テェーブスとの１ヵ月

小滝　渝梅（納内町 8 区の 1）

外国からの「お客さん」を受け入れる。考えただけでも気の遠くなるような面倒なことが起こりそう。私達の多くはこのように反応するのではないでしょうか。

カレン・テェーブスは私達の家に滞在する 20 番目くらいの外国人でした。結構馴れてきた私達はほとんどお客扱いもできず、普段どおりの生活を続け、彼女には自由に過ごしてもらいました。

彼女の場合は根が明朗で楽天的な性格でしたから、ほとんど心配もなく１ヵ月が過ぎてしまいました。ただやはりカナダの子供です。好き嫌いが明確で、学校でも「気に入らないこと」に対しては「ＮＯ」と反応するものですから、先生方は戸惑ったことと推察しております。

ただ1つ困ったことは食物でした。好き嫌いが極端で偏食が激しく健康のことを気遣いました。魚介類はまったく駄目、野菜の種類も限定され、あまり健康的でない食事を続けるカレンが心配になりました。

それでも何とか楽しく過ごしたらしく、友達から習った日本語を駆使してサンキューカードを置いて帰りました。カレンが口癖のように歌っていた「サラリトシタウメシュ」のＣＭを見るたびに思い出しております。

メリッサとの３３日間

池田　敏江（4条4番10号）

お引き受けの返事をしてから、ずっと頭の中で「大丈夫だろうか」という不安を持ち、食事のこと、会話のこと、日常生活の違いなど、考えれば考えるほど不安だけがつのっていきました。

いよいよメリッサが来日。ホテル板倉さんまで迎えにいくと、とてもかわいくて、シャイな感じの彼女がそこにいました。「ああ、この子と１ヵ月間過ごすんだな」という実感が初めてわいてきたのです。

肩の力を抜いて彼女をしっかり受け入れようと決めました。

一番最初に心がけたことは、食事のことです。人間にとって食べることは、『生活の基本』。私も食べることは大好きなので、きっと歩み寄れるきっかけになると信じて……。思っていたとおり、それをきっかけにやっと家族の一員としてのスタートをきることができたのです。

わからないながらにも辞書を引き、単語を並べて会話をしていくうちに、不思議なもので、外国にいって会話をするよりもよっぽど外国にいるような感じがしました。メリッサがくるまでは、外国人に会っただけでドキドキし、向こうから声をかけてくるとどうしよう、何か話をしなくてはとあせり、格好をつけていた自分が何かウソのような気がします。

振り返ってみれば、家族も様々なことを考えて過ごした１ヵ月のようでした。夫は、普段通りでいいというのに、気を使っていたようですし、息子は一歩下がって待っていたようでした。それを感じたのかメリッサの方がボール投げをしようなどと言って誘ってくれました。また、同居の父は、日本語にアクセントをつけて英語のつもりで話し、母は、「一人でこんな遠いところまでよく来た、よく来た」といって（もちろん日本語）涙を流しながら出迎えた姿を昨日のことのように思い出します。

家族の中でも、娘の沙耶可は、今までにない新鮮で貴重な体験をしたようです。特に学校生活の違い（髪の毛は染めてもＯＫ、制服はなしなど自分で責任をもてる範囲ならいいということ。その基本には個性を尊重した考えがあると痛感！）には、驚くことばかりで未だに話題に上ります。

そして、私は娘がもう一人増えたような気持ちです。帰国した時は、家族が減って寂しいと思い、まだまだ伝えたいことや言いたいことがあり、悲しいかな英語が流暢に出てこないので、本当に私たちの愛情がメリッサにとどいただろうかと今はそんなことを思ったりもしています。それでも、メリッサがわが家に来て２週間目くらいに初めて『ママ』と呼んでくれた時、『何かお手伝いはない？』と声をかけてくれた時のあの喜びはきっといつまでも忘れることはないでしょう。

『言葉』は、もちろん大事なコミュニケーションの手段ではあるけれど、それがすべてではないことを今回の受け入れで身をもって体験することができました。

最後にお世話になったたくさんの方々に紙面をおかりし、改めてお礼申しあげす。本当にありがとうございました。

（池田ファミリー）

カナダの少年クリス

谷口　博美（芽生 10 号山 3 線）

4 月 20 日、カナダからクリス少年がやって来ました。大きなスーツケースにボストンバック、ロードホッケーのスティックに、枕をかかえて……。

国内ならまだしもカナダから枕を持って……？？

神経質な子どもなのだろうか、1 ヵ月どの様に接していけばいいのだろうと大きな不安がよぎりました。でも話してみると、気さくで活発そうな男の子なので少し気が楽になりました。年令が次男と同じだったのでうまくやっていけるかと思っていたのですが、同年とあって、お互いにそれぞれの自我が対立して、英語と日本語のケンカもしばしばでした。でも 2 人にとっても、家族にとっても、とても良い経験をした様に思います。

最初の1週間は引率して来たカールトン氏と、協会の方達との行動が主でしたが、2 週目からは深川中学校に自転車で通学していました。

カナダと日本の交通ルールのちょっとした違いからヒヤヒヤさせられたこともありましたが、学校に慣れるにつれて友達もでき 1 人で遊びに行ったりと、クリス少年にとっては深川での 1 ヶ月を楽しむことができたのではないかと思っています。

我家は農業なのでホームステイの間、田植えなど忙しい時期で、充分に相手をしてあげる時間が持てなかったのですが、田植えがどういうものなのか体験してもらおうと思い、長靴にツナギ・ゴム手という格好で田植機に乗せたところ、とても喜んでくれました。

ホームステイというと、とかく食事はとか、何をしてあげたらいいんだろうとか頭を悩ませるところですが、自然体でないと長続きしません。ですから、悪い事については叱りましたし、彼はとても絵が上手なのでほめてあげると素直に喜んでくれました。

私にとっては、長くもあり短くもあった 33 日間でしたが、彼は農業体験ができましたし、私は英語を学ぶことができました。覚えている限られた単語のみの会話でしたが、彼は理解してくれて、それがきっかけで拓大の英語教室に行ってみようと思い、英語を習うことは勿論ですが、そこでのカナダの先生、留学生、他の受講生との出会いがあり、こんなに沢山の人に出会えたのは、クリスとの出会いがあったからだろうと思っています。

今年の夏休みには、深川の中高生 8 人がカナダへ行きますが、何ごとも体験・経験なので、言葉も文化も体で感じて来てほしいと思います。

国際交流協会の足跡

今年の 3 月に設立された深川国際交流協会のこれまでのおもな活動内容は以下のとおりです。

1997.3.27	国際交流協会設立総会
4.20 ↓ 5.23	カナダより中学生 3 名をむかえました
6.14	インターナショナルデーの開催
7.30 ↓ 8.12	深川市青少年海外派遣 カナダ訪問 （ブリティッシュ・コロンビア州アボツフォード市,チリワック市）

カナダのフレーザー･バレーってなに？①

～「田園都市アボツフォード」紹介～

フレーザー・バレー地域

カナダはとても広い国です。カナダの西にあるバンクーバー市に住む人が朝起きるころには、ずっと東に住んでいる人はもう昼食を食べています。私たちが交流したいと思っているフレーザー・バレーはバンクーバーの東の方に広がる地域のことです。フレーザー・バレー地域は太平洋に注ぐフレーザー川の流域にあるいくつかの市町村をまとめて呼ぶときに使われる名前で、カナダでもっとも農業の適した地域として有名なところです。

地域の中心都市アボツフォード

今回紹介するアボツフォード市は、このフレーザー・バレー地域の中心都市です。私たちのところと比べてみると、札幌がバンクーバーに、フレーザー川が石狩川に、フレーザー・バレー地域が北空知に、そして深川がアボツフォードに相当すると言えます。

アボツフォードの人口は約 11 万人で、ブリティシュコロンビア州の一番新しい市です。というのも、1995 年 1 月にマックイ地区とアボツフォード地区が合併してできた市だからです。

交通の中心地アボツフォード

カナダを横切る高速道路の国道 1 号線がアボツフォードを通っているだけでなく、南へ向かう道路を通ると、月曜日の朝アボツフォードを出発したトラックが水曜日の朝までにはアメリカのロサンゼルスで荷物を降ろすことができ、トラック輸送会社がたくさんあります。また、鉄道もカナダ国鉄とカナダ太平洋鉄道の 2 つが走っています。

地上を走るだけでなく、空の交通もさかんです。アボツフォードには、バンクーバー空港につぐ空港があります。ここで毎年 8 月、3 日間の世界的規模の飛行ショーが行われ、25 万人の観客が集まります。

田園都市アボツフォード

アボツフォードの産業の中心はやはり農業です。温暖な気候と豊かな土壌の農業地帯が乳製品、卵、にわとり、野菜、ベリー、家畜を生み出し、地域の経済的安定を担っています。これらの農産物の食品加工には、ジャム、ゼリー、冷凍の果物と野菜、七面鳥食品、チーズやその他の乳製品などがあります。

また、アボツフォードはフレーザー・バレー地域の商業の中心です。商業圏の人口は約 20 万人です。市街地には大規模ショッピングセンターを中心とする多くの商業地域があり、それぞれの個性を持っています。

幼稚園から大学まであるアボツフォード

深川と似て、教育機関は幼稚園から大学まであります。公立の教育機関には 35 の初等学校（小学校）、8 つの中等学校（中学校＋高校）があります。また、私立学校は小学校、中等学校、中等後教育のレベルです。

アボツフォードに大学本部をおくフレーザー・バレー大学は州立の総合教育機関です。この大学は 1974 年に創設され、1991 年に一部が 2 年制から 4 年制に変わり、ユニバーシティカレッジとなりました。主なキャンパスがアボツフォード・チリワック・ミッション・ホープの 4 ヵ所にあります。学生は 95 年度で 5,425 名、生涯学習コースの聴講生が 94 年度で 12,750 名もいます。

人と人とのつながり、心のふれあいを求めて

深川市立納内中学校教諭　　森岡　千香

“Hi,Karen！”“Hi！”

本人の開放的な性格と、本校生徒の素直で優しい人柄が見事に合い、いち早く学校にとけ込んだカレンのまわりをいつも多くの生徒が取り囲んでいました。たどたどしい英語ですが実に自然に使う生徒と、自分を理解してもらおうと懸命にやさしい英語を何度も繰り返すカレンとの間には、もはや国境などありませんでした。

本校生徒は、相手の立場を尊重し、自分の意志や考えを的確に表現しようという意欲的な姿勢が数多く見られ、確実に変容していきました。さらに授業はもとより、奉仕作業や部活動、そして日常生活のあらゆる場面での交流を通して本校生徒が得たものは、文化や生活習慣、価値観を「違い」として認識し、尊重できる豊かな心でした。

国と国、人と人とのつながりを国際交流に求め、心のふれあいを体験させる機会が大切であることを実感しました。

カナダからの訪問者と接して

深川市立深川中学校教諭　　花輪　題暢

今年の５月、カナダからの留学生２人が深川中学校にやってきました。一人は男の子、もう一人は女の子でした。わがクラスには女の子が入ってきました。メリッサという名のとてもおとなしいサッカーが好きな可愛らしい子でした。今まで自分の学級に留学生を受け入れたことがなかったこと、自分自身深川中学校へ来たばかりであったということもあり、どう対応してよいのかまったく分かりませんでした。とりあえず、元気で明るい性格の生徒のそばに席をもうけ、楽しく日本の学校での生活をしてくれたらいいなと考えました。

隣のクラスの担任の先生は英語の先生ということもあって、そのクラスに入っていた留学生と上手にコミュニケーションをとっており、そのクラスの留学生は早く学校に慣れているようでした。英語のできない自分は対応がまったくできず、もっと英会話をしなければならないなとつくづく反省させられました。メリッサが少しでも日本語を話すことができたらなというのが本音です。

１ヵ月足らずという短くて長い期間ではありましたが、食生活のちがい、学校生活のちがい、文化の違いなど、生徒はじかに体験できたのではないでしょうか。「先生、カナダの学校ってお菓子をもってきてもいいんだって……」一人の生徒がこんなことをいっていました。今までになかった習慣を取り入れて改革していくことはとても大切なことだと思います。しかし、今まで培ってきたものをすぐに切り替えるということはなかなかできません。教師側としては、生徒に対する対応が難しくなってくる部分もあるのではないかと思います。ともあれ、色々な文化と交流しあうのはとても大切なことだと思います。これを機に海外旅行にいった時に苦労しないためにも、少しでも会話ができるように、そして自分自身もっと日本を知ることに努めたいと思います。

クリスが残したもの

深川市立深川中学校教諭　　小野寺　祐洋

「クレイジーボーイ」というジョークで学級に登場したクリス。クラスの子供たちはその発言を真に受けて、どぎまぎしていたのを覚えています。明日からの数週間は一体どんな毎日になるのだろう……。しかし、文化の違いはあっても、言葉の違いはあってもやはり子供の心は通じ合うものです。明るく元気でやんちゃ坊主のクリスは、すぐに子供たちの人気者となりました。そして、クリスも毎日たくさんの日本語を覚え、日本のいたずらを知り、私を楽しませてくれました。

あっという間に、クリスとお別れする日がきてしまいました。子供たちはお別れ会になぜか「借り物競走」を企画しました。子供たちは、日本語と英語で書いてある借り物競走に使う札を一生懸命に作っていました。そして、借り物競走は意外にも盛り上がり、楽しい一時になりました。

クリスが去って、なんだか寂しい気持ちが子供たちの心に残されました。しかし、クリスの元気が子供たちの心に、私の心に思い出となってまだ残っています。クリスにまたいつか会いたいねと、子供たちと話しています。

「インターナショナルデー」を終えて

松田　俊雄（国際交流協会　国際理解・ふれあい部会会長）

国際理解・ふれあい部会の担当事業である「インターナショナルデー」が 6 月 14 日（土）午後 3 時からプラザホテル板倉で開催されました。

今回は、ゲストとしてカナダ人留学生 4 名と旭川市ＡＥＴ（英語指導助手）のヘニーさんを迎えて、中高生 20 名程度の参加をいただき、終始なごやかななか、2 時間の国際交流がなされました。ゲストと中高生の参加者が昨年に比べると半数程でしたが、一人一人が充分に交流をするには、丁度良い人数であった様に感じます。

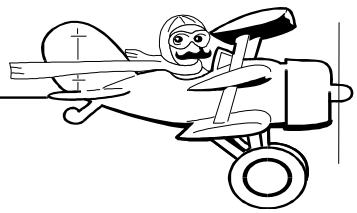
納内中の森岡さんのちょっとやりすぎな型破りの通訳で、ゲストの自己紹介からプログラムは始まりましたが、緊張した会場の雰囲気がすっかりなごやかになりました。

ゲーム、フレンドシップトーキング、ダンシングタイム、英語クイズ等のプログラムが、企画・指導のほとんどを、拓大の土門さんに頼って終わらさせていただきました。

理事長や役員の皆さんと部会のメンバー数名の方にお手伝いをいただきありがとうございました。

ゲスト・中高生全員が「楽しかった」と言って帰られたことは、意義深い事であったと思います。

募集しています！



☺「ホストファミリー」 ･････････ 現在 38 家族の方が希望しています。

☺「通訳・翻訳ボランティア」 ･･･ 現在 21 名の方が希望しています。

☺「深川国際交流協会会員」 ･････ 現在、一般会員は 107 名、賛助会員 58 団体です。

【問い合せ先】
深川国際交流協会事務局（深川市企画課） ☎26-2215

【編集担当】
深川国際交流協会　企画広報部会　広報編集委員会
編 集 長：南部雄二　　副編集長：寺下良一
編集委員：池田敏江・上垣由紀子・橋本　信・高橋保之・谷口保幸